ISSN 0386-4790

国文学研究資料館報

第34号

平成２年３月

当館におけるデータベース事業の展開

山中光一

当館は昭和五十二年の開館以来、収集資料の閲覧サービスを行うとともに、毎年新たに閲覧に供する館蔵マイクロ資料および館蔵和古書の目録をコンピュータで編集し、冊子体の目録を配布して利用者の便をはかってきた。

しかし年数を重ね収集資料の累積が進むと、年ごとに印刷された追加目録を何冊も探すのは不便で、累積された全所蔵資料の中から一度に必要な文献資料を検索できるようにするデータベースサービスの要求が高まってきた。そこで当館はそれら所蔵資料の目録データを統合してデータベースを編成し、オンラインで、しかも誰でも容易に検索できるシステムを開発し、昭和六十二年からサービスを行ってきている。（これらについてはすでに館報28号に報告。）

一方毎年発表される約一万件に及ぶ国文学関係研究論文の目録提供に対しても研究者の要望が強く、館は以前から毎年『国文学年鑑』を刊行してその要求に応えてきた。これに対しても昭和六十二年刊行の六十年版から逐次印刷をＣＴＳ（コンピュータタイプセッティング）方式に移行し、毎年の『国文学年鑑』を印刷すると同時に、その論文目録データがコンピュータで扱えるデータベースとして累積されるように開発を進めてきた。（詳細については、本館報第二ページ掲載の「国文学論文目録データベースの公開をめざす試行について」を参照されたい）

このほか本年度岩波書店から刊行された『古典籍総合目録』についても、そのデータベース化が計画されており、将来は現在科学研究費で研究的に開発を進めている

(1)原資料の画像によるデータベース

(2)古典本文データベース

(3)連歌作品目録データベース

(4)近世初期版本挿絵データベース

等も何らかの方法で利用できるようにすることが目指されている。またオンラインの利用のほか、これらのデータベースをパソコン等でも利用できるように

(5)ＣＤ－ＲＯＭ（コンパクトディスク・リードオンリ・メモリ）による出版

も試作が進められている。なおこれらのデータベースを編成するに当って、そのデータの表記やヨミを管理しコンピュータが参照し得るようにする

(6)著者名、作品名の典拠ファイル

(7)用語および人物名ファイル

(8)ＪＩＳ規格外の文字の辞書ファイル

等も一種のデータベースであって、これらの充実もデータベースの品質を高める上で不可欠である。

以上のように当館のデータベース事業は今後さらに多面的な発展が予想されている。そのためそれに応じた体制や組織の充実も必要であり、その努力も一歩づつではあるが進められている。

なお、当館の直接のデータベース事業というよりもう少し広く、当館のコンピュータシステムの国文学研究への利用、特に大型システムの役割は何かということが、最近パソコンの発展・普及とともに改めて重要視されてきているので、本年二月二〇日当館で「国文

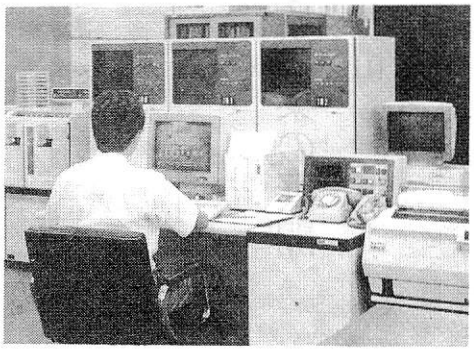
目次

当館におけるデータベース事業の展開……山中光一　1
論文データベース・学術情報ネットワーク　2
共同研究報告……3
文庫紹介⑭「新日吉神宮蘆庵文庫」……5
新収資料紹介㉙「名賢和歌秘説」……6
新収和古書抄　平成元年……7
彙　報……8
第十三回国際日本文学研究集会会議録……8
利用者へのお知らせ……9
平成二年度春季学会開催一覧……10

学とコンピュータ」の第一回シンポジウムを開催した。当館の現状について情報処理室長の安永教授から紹介の後、エンドユーザーの立場から、あるいはシステム側の立場から、講演や参加者のコメントなどに様々な御意見を戴いた。今後はそうした館外の研究者の御協力や御鞭撻を受けて館のデータベース事業が一層発展してゆくこととなろう。私自身は今年三月で退官することとなるが、最初のコンピュータ導入から十数年このことにかかわって来た者として切にその一層の発展を期待している。

（付）以上は現状の全体的概観であるが、国文学論文目録データベース、および連歌作品目録データベースの二つについては、今一応目標に達しつつあるので、簡単にその内容についても紹介することとしたい。ただし、前者については別項に記載するので、ここでは連歌作品目録データベースについて付記する。

昭和六〇年「連歌資料のコンピュータ処理の研究」について館の共同研究報告が出されているが、その後科学研究費総合研究により全国の連歌資料の調査とデータ作成が行われ、さらに「研究成果公開促進費」いわゆるデータベース科研によってそれらのデータを入力し、現在、四二の文庫等の資料一四、〇九〇件について十八項目のデータがデータベースとして累積されている。これらについて同一作品についての一応の同定情報を付し、日付けまたは発句順の目録版下を作成して、作者索引、発句索引とともに関係研究者の校閲が行われている。今後さらにデータを磨いていずれ公開することを目指している。



国文学論文目録データベースの公開をめざす試行について

当館では、平成二年度に、国文学論文目録データベース（仮称）のオンライン検索サービスの実施をめざす試行を行うこととした。

当館では、昭和六十二年度から、当館所蔵のマイクロ資料目録と和古書目録との二つのデータベースのオンライン検索サービスを実施してきた。

今回の試行は、その二つのデータベースのオンライン検索サービスに加えて、近い将来に国文学論文目録データベース（仮称）のオンライン検索サービスを実施することを目標として行う実験的な試行である。

この国文学論文目録データベース（仮称）は、当館の事業として作成している『国文学年鑑』を基礎として作成したもので、収録論文の、論文執筆者名、掲載誌名、論文題目から摘出した検索キー、などでオンライン検索できるように工夫したものである。

今回の試行は、実験的な試行なので、初めは相当な制限を設けて行い、逐次、制限を緩めてゆくことになるが、館外の一般利用者の利用については、改めて（本年九月発行予定の次号館報に掲載の予定）お知らせする。

なお、今回の試行の期間は、差し当り平成二年度中（この四月から）とし、この間に各種の評価を行い、その期間中に、次の段階、すなわち、国文学論文目録データベース（仮称）のオンライン検索サービスの本格的な実施に向けての移行の計画を検討してゆく。

（データベースサービス準備室）

学術情報ネットワークへの加入について

昨年（平成元年）十月に当館情報処理システムは学術情報ネットワークに加入しました。これに伴い、七大学大型計算機センターは、NTTのDDXパケット網経由から、学術情報ネットワーク経由の接続に移行しました。従来、大型計算機センターから大学間コンピュータネットワーク経由で利用する際にかかっていたネットワークに係る額の分の料金がかからなくなりました。

（情報処理室）

――共同研究報告――

近世儒林伝の研究

宮崎修多

『先哲叢談続編』の東條琴台自筆稿本（実践女子大蔵）や『間散続録』『近世儒家叢記草稿』（いずれも慶応大学幸田文庫蔵）『日本儒林談』（天理図書館蔵）など『先哲叢談』系儒林伝の母胎となる稿本とおぼしきものを調査し、その上で『先哲叢談』の著者原念斎の残した浩瀚な碑文伝記集成『史氏備考』（静嘉堂文庫蔵）の検討に総体の焦点を移行させた。儒林伝には他に見るべきものも少なくないが、例えば古くより伝記資料として引かれることの多い『近世叢語』『続近世叢語』が本来的には世説に擬した逸話集であるなど、純然たる叢伝を企図しないものもあり、また同趣でも『事実文編』など既に公刊済みのもの、日本各地に残る地方儒者の伝記碑文集の如きも暫くこれらを措くことにした。過去の地方史家による高水準の史伝研究を当面の対象から除外することには疑義が出されたが、これらを網羅することの至難さと僅か一年の作業と予算に馴染まぬこともあっておのづから割愛せざるを得なかったのである。現在『史氏備考』の碑主別筆者別目録を作製しつつあるが、対象より外した他の儒者伝記資料所収の人名程度はその目録に追補していくことにした。

もとより我々は近世儒者資料総覧を目途とするのではない。近時複製本も行われた『先哲叢談』とその類書にあえて照準を据えたのは、原念斎と東條琴台という稀代の博学家が、人間の伝を草するにあたっても考証そのままの無色透明な公正さを保ちうるかという疑念からであり、かつ人名辞典などでいまだに屈強の典拠となる程でありながらそれ自体の本文批判がまた寥々たるものであったことに因る。残存の母胎稿本から検討を始めたのも一にそのことが我々の脳裏に存したからであった。それは「歴史」の季節といわれる江戸末期における伝記の在り方という以上に念斎や琴台の史眼或いは個性に収斂していく問題でもあって、僅かに報ぜられていることだが、対象によっては筆者の褒貶まかり出て運筆一様ならざることもあるらしい。手始めに研究員各一伝づつ、手の届く範囲の資料をもって自由に註釈を加え、仮に「先哲叢談研究」と銘打った雑誌にそれらを聚めることもいつしか口々にのぼる様になった。今年中には発刊、併せて前述の稿本類の紹介も誌上にこころみる予定で居る。

御伽草子の研究

小峯和明

本共同研究は今年度の客員教授であるパリ第七大学のジャクリーヌ・ピジョー教授を中心に、館外から浅見和彦・神野藤昭夫・佐竹昭広・外村南都子・松本隆信の各氏、館内から小山弘志・新井栄蔵・松野陽一・樹下文隆・小峯和明が加わり、四月から八月まで月一回の研究会を開いた。各月の発表報告は以下の通り。

四月・ピジョー氏の基調報告
五月・外村氏「歌謡における物尽し―早歌を中心に―」
六月・ピジョー氏「御伽草子における物尽し」
七月・神野藤氏「物語の物尽し・お伽草子の物尽し―『堤中納言物語』の「よしなしごと」を中心に―」
樹下氏「歌謡に見る物尽くしの手法―ロンギ・クセを中心に―」
八月・浅見氏「撰集抄の表現」

御伽草子の中でも、とくにピジョー氏がテーマとしている「物尽くし」に焦点をしぼり、他の分野における「物尽くし」と相互に照らしあう形で議論が進められ、その表現方法やパターン分析を通して、広く日本文学における「物尽くし」とは何かまで認識が及んだ刺激的な会であった。

ピジョー氏は在任中、当館での講演をはじめ、成渓大学や白百合女子大学などでも講演され、精力的に活動された。

松宇文庫の調査研究

竹下義人

本共同研究は、当館の一事業として、昭和六〇・六一年の両年度

にわたって調査・収集の行なわれた松宇文庫の俳書目録を作成・公刊し、もって広く一般の利用に供することを目的に計画されたものである。松宇文庫の概要や調査・収集時の模様に関しては、『館報』第29号（昭62・9）掲載、雲英末雄氏の「松宇文庫について」という一文において詳しく報ぜられており、今回の松宇文庫の目録刊行の意義についてはもはや多言を要しないであろう。

目録作成を具体化するにあたっては、先述のごとき当館の事業とも密接な関連があり、また当初より調査カード（約二六〇〇点）にもとづいて原稿化することが提案されていたこともあって、共同研究の一環として取り組むことが最善の方途と考えられた。そこで、調査に関係した調査員全員の参加と合意をもって、原稿作成から出版まで、一致協力して遂行することが必須となったわけである。

このような経緯があって、研究会の方は、多数の研究者の参加を得ることができ、有意義なものとなった。席上では主に原稿執筆に関わる様々な問題点が討議されたが、以下、その成果を簡潔にまとめて報告しておきたい。

まず、目録の内容・体裁については、既存の目録を参考にしつつ、利用者の利便性を最優先したものとする、との基本的合意を得た。それを踏まえ、刊行年代順の書名配列、マイクロフィルム・紙焼請求番号の併記、索引の完備、撮影に至らなかった資料書名の登載等々が提案された。さらに編著者・序跋・刊記・広告などの具体的な記載事項については、できるだけ原資料の記述を尊重して極端な省筆は行なわないこと、また、とくに備考欄を設けて、該書の書名や成立に関わる情報や補足的事項をできるだけ盛り込むようにすること、などが確認された。これらの点については、なお細部にわたる検討が加えられた上、「執筆要領」としてまとめられた。

原稿化作業は、各自割当分を先の「執筆要領」に従って進めており、平成二年七月末頃までには完了する見込みである。以後、順次原稿内容の調整に入り、さらに検討すべき問題点が生じた場合には、随時会合をもってその解決にあたることになった。

松宇文庫の目録刊行は、多くの俳諧研究者にとって待望久しいものであろう。今般いよいよそれが実現する運びとなり、その成果がおおいに期待される。今後とも関係各位の一層のご理解とご支援を切に望むものである。

関東天台に関する調査と研究

樹下文隆

中世の文学活動を特徴付けるものの一つに、「談義」という概念がある。学問授受が口伝という形態を取ったこの時代、談義は学問相承の主要な方法であり、その所産が膨大な量の見聞・聞書類である。それは、様々な文学作品に垣間見える秘事・口伝の世界の宝庫であり、その奥書識語からは、口伝伝授を廻る人々の関係や活動の実態が明確に窺われる。

関東地方に展開した天台宗寺院では、僧侶の修行・学問研究のために〈談義所〉と称する機関を設け、多彩な活動を行なっていた。文字通り、そこは談義をする所であり、法華経を中心に多くの談義・直談が行なわれた。本共同研究では、この談義所の活動を対象として、その歴史・実態を調査・研究し、そこに伝来・形成された文献の調査・整理を行ない、国文学に関わる問題について研究することを目指した。関連資料は、関東に限らず各地の天台宗寺院に散在し、また身延山久遠寺等の日蓮宗寺院にも蔵されており、これらの調査も行なう必要がある。短期間の共同研究で全てを網羅するのは不可能であり、資料の豊富な寺院を集中的に調査する方針のもと、メンバーの大半が調査に関与している天台真盛宗西教寺と身延山久遠寺の二寺院に対象を絞った。

西教寺については、以前から個々に収集しており、久遠寺については、数度有志で調査に訪れた。それらの資料をふまえて研究会を催し、各自の研究成果報告・資料提供を受けて、中世宗教文化の一面を明らかにすることを通じて文学史の検討を試みるべく、相互に意見を交換した。

本共同研究は今年度で終了するが、メンバーは引き続き共同調査を続け、その成果は、個々の研究に反映されるとともに、いずれ何らかの形でまとめられる予定である。

近世出版史の研究

―近世後期を中心として―

本田康雄

研究代表者・四日市大学教授・朝倉治彦。近畿大学教授・今田洋三、国士館大学講師・鈴木俊幸、東洋大学助手・中山尚夫、国文学研究資料館教授（館内連絡者）本田康雄

近世文学全般については作品、作者を中心に細かく研究が進められているが、近世後期から明治初期にかけては主要な作品、作者についてもなお未開拓のものが多い。本共同研究はこれら未開拓の領域の研究を進めるため作品、作者、および書肆をめぐってその出版状況を特に地方出版にまで視野を拡げて調査することを計画した。実際の作業は①文献目録等により出版関係の論文、作品年表、書誌・書目のリストを作成、②国文学研究資料館のマイクロフィルムおよび所蔵資料中の関連資料の調査、整理、③二回の会議でメンバーそれぞれの立場から問題点を提起、④また上記と併行してメンバーのこれまでの研究成果を出版史研究の立場から検討し再構成するための討議を行った。研究成果はメンバー各自の論文、年譜、年表等の発表が期待されるが、近い将来同じテーマでこの共同研究を継続して行うことも計画している。

近世演劇研究情報データベース編纂の研究

武井協三

近年さかんになってきた、国文学研究へのコンピュータの利用であるが、現存十万枚をこえると推定される歌舞伎番付の整理収集には、大きな力を発揮すると予測される。番付は、量的には膨大であるが各資料間にある程度の共通する形式がみられる。この特色を適切に把握すれば、コンピュータによる目録と集成化が可能であろう。本共同研究では、昭和六二年度の「歌舞伎番付総合目録の標準化と編纂のための基礎的研究」の成果を受けつぎ、番付のコンピュータによる整理収集方法が検討された。とくに、整理目録化のみではなく、生の番付の影印を機械に収録し、ファックスなどにより、全国から通信で番付写真が見られる方途を探り、主として光ディスク利用の問題、パソコンと大型コンピュータの役割分担の問題などが話しあわれた。赤間亮「歌舞伎番付とコンピュータ」（『歌舞伎―研究と批評―』第4号）に、その成果の一部がとり入れられて発表されている。

文庫紹介⑭

新日吉（いまひえ）神宮蘆庵文庫

竹窗夜雨

降りおもる竹のしづくも音ふけて
雨静かなるよるのやまぢ
（小澤蘆庵『六帖詠草拾遺』の「新日吉御所十二景」より）

京都東山七条より東へ約三百米、朝夕は京都女子中高大学の女学生があふれる坂道の右手に、現在の新日吉神宮がある。蘆庵の当時にはなお少し東山寄りの位置にあり、閑静な山家の社であったろう。

「ただこと歌」を主張した歌人小澤蘆庵、享和元年歿、七十九歳。蘆庵の蔵書はその遺言により、門人でもあった二条富小路の書肆吉田四郎右衛門の許に移された。やがて文政初年ごろに、やはり門人の藤島宗順が祠官を務める新日吉社に寄託されたという。

昭和二十五年七月十一日、蘆庵門人中野熊充の末で市内神楽岡に住む医師中野武（稽雪）氏や新日吉社宮司藤島益雄氏（宗順の末）らによって、蘆庵百五十年正忌を機に蘆庵追悼祭・遺墨展・記念講演会が催された。この時より新日吉社内に蘆庵文庫が設置され、現在は藤島洋三氏（益雄氏息）が管理なさっている。

文庫の内容は蘆庵の著書・筆写本・懐紙・消息・短冊など二百点余で、殊に注目されるのは蘆庵家集『六帖詠藻』四十七冊である。同書の資料的価値を含め、文庫の来由等については、中野武氏の著書『小澤蘆庵』『小澤蘆庵その後の研究』に詳しい。

当館は来年度よりカードを用いての調査を行う予定である。マイクロフィルム収集については未定。蘆庵文庫の目録は未だ整備されておらず、新資料の発見も期待される。

〔所在地〕
京都市東山区妙法院前側町四五一

（文献資料部　深沢眞二）

新収資料紹介㉙

名賢和歌秘説

本作品の原題は『和歌物語』。南嶺多田義俊が堂上諸家の言説を集成し、寛延元年（一七四八）口述筆記として成立した歌学書である。作歌故実の他、堂上歌人等の逸話・秘伝などを広く収めたところから歌壇に迎えられて流布し、現存伝本も少なくない。後記する鈴木淳氏の論によると、約三十本を数える伝本の伝来経路は地下官人層と武家層に大別されるが、前者によって、公家にも秘かに珍重された痕跡がうかがえること、後者では「名賢和歌秘説」と外題される諸本が旗本小宮山昌世書写本を源流として数多く伝写されたことなどが知られるという。近時館蔵となった本書は、江戸武家歌壇での源流本になったという、正にその小宮山昌世筆写本そのものである。

即ち本書は、袋綴一冊本で、縦二三・一糎、横一五・七糎。亀甲窠文繋ぎに龍文様を型捺しした濃緑色臘引き表紙の左肩に白紙題簽を貼り「名賢和歌秘説全」と外題を墨書。本文料紙は楮紙。墨付四四丁、遊紙後一丁。見返しに貼紙が一枚付されている。一面十一行書きで、明和二年乙酉五月の小宮山昌世の序（自筆、「源氏」「昌世之印」を捺す）一丁。本文は「名賢和歌秘説」と内題し、一つ書きで八五項が第二丁オから第四丁オまで記され、四四丁ウに「甲申夏六月十三日」の昌世の書写奥書がある。本文の全体にわたって、墨、朱、青墨による書入れ注記、合点が夥しく記入されている。昌世自身による注と推定される。印記は前記序末の昌世の二種の他に、巻頭第一行右肩に「信而好古」の楕円印がある。貼紙も昌世の筆で「和歌てに波極秘伝抄一冊　是は小本ニて□□候／名賢秘説一冊　是はみの紙ノ大サ／右二冊共に私之おく書仕候／小宮山木工進」とあって、全ての徴証が昌世筆写本たることを示している。

序・奥書によると、昌世は明和元年六月十三日、近江守花房職朝の所持本を借りて書写した（『名賢和歌秘説』への改題も昌世によると序にある）という。花房職朝は五千余石知行の幕臣で書院番頭の職が長かったが、その後明和元年六月二八日に駿府城代となっている（寛政重修諸家譜）。他方小宮山昌世は四百俵を録した代官であったが、宝暦九年致仕、安永三年八六歳で没するまでの晩年を小石川に閑居して読書人としての生活を送ったという（鈴木氏論文）。若くして中院家に学び、後、冷泉為村門にも学んだ彼の言説は広く江戸歌壇に影響を残したらしい。早くも明和元年八月二八日と九月の昌世本に拠る幕臣二人の書写奥書を有つ伝本が報告されていることによってもその事情をうかがうことができる。前記の如く本書の序は昌世自身によってその翌年の五月に叙されるのであるから、如何にその伝流の初発が早かったかを知ることができよう。これら伝本の末には日尾荊山や屋代弘賢の名が現われてくる。以て幕臣歌壇に迎えられた様が知られるのである。

近世和歌研究会の会誌である「近世和歌文学誌」第一集（昭59・5）はその誌面の大半を本書『和歌物語』の本文翻刻と研究に充てている。当時本館助手であった島原泰雄氏を代表者とする同会の二年間にわたる研究の成果という。その伝本研究（鈴木淳氏執筆）の中で推定されていた、武家層に流布していた伝本群の源流に当る伝本がかくして出現したわけで、諸氏の研究の精度は更に高められることとなった。特に前記した昌世による三筆の書入れ注記の腑分けが可能になった点など、原本ならではの資料性は評価されてよいと思われる。

（文献資料部　松野陽一）

新収和古書抄　平成元年

四十二の物あらそひ　写一冊

内題「源氏四十二物あらそひ」。近世初期写（慶長頃か）。室町物語。伝本はかなり多いが、和歌の異同も少なからずあり、注目すべき一本である。

感山雲臥紀談〈暁螢述〉　一冊

本書は五山版感山雲臥紀談（貞和二年刊）の寛永中刊の附訓覆刻本である。尾に「柴田文庫」の朱方印あり。書入・朱引あり。蠹敗あるも完本。

太平記抄　四十巻八冊

古活字版、十二行本。要法寺版太平記抄である。宝玲文庫・小汀氏蔵書の蔵書印があり、さきに当館の蔵するところとなった太平記音義（九九―四八）と一具のものである。

定家八代抄　写一冊

流布本（精撰本）系。縦三三・二糎、横二四・四糎の斐紙（裏打改装）、袋綴本。補修表紙。江戸初期写。墨付一一一丁。流布本系の奥書を有つ。総歌数一八〇四首（他に恋二、雑中に補記歌三首）。合点は墨掛点（樋口本の黄点）、朱掛点（同）、朱丸印〈大〉、同〈小〉、朱点の五種。本文は四辻本に近い善本である。

歌襄井蛙談　三巻三冊

寺町百庵の歌学書。三巻。刊記「宝暦十一載辛巳九月日／東都書林　日本橋南一丁目須原屋茂兵衛／橋本町二丁目近江屋源七」。裏打本。朱筆書入少々。印記「渡辺千秋蔵書」「尺如堂図書記」「小汀文庫」。

法花譯和集　五巻五冊

武州星野山実海撰。法華経々文歌の注釈書。承応二風月堂庄左衛門板。改装裏打本。見返しに法華経二十八品の教理要旨の書入れの他、本文中にも若干の注記がある。

四座御役者手鑑　刊　坤巻一冊

二冊のうち下巻のみ存。観世・宝生・御部屋役者・惣役者衆取次の計47名収録。新九郎が宝生に属し、元禄二年没の梅若兵九郎が載らず、元禄八年没の鷲山三郎が載る。将軍鼎屓の宝生座の繁栄を示す好資料。「鴻山文庫」印あり。

扶桑撰対　写三巻三冊

林鵞峰著。国史上の人物の伝を漢字片仮名交に各部類二名づつ対す。松平忠房の請に応じた計三六類七二名の叢伝は、画像を作り六曲一雙の屏風に仕立てることを期したもの。延宝五年鵞峰跋。本朝三十六対小伝とも。西荘文庫旧蔵。

瀟湘八景図画詩歌　折帖大本一冊

元禄八年刊。吉田五平次書、長谷川等雲画。本文は詩歌一枚八景画一枚計十六面、巻頭巻末に一種づつ画を配し扉絵あり。当時八景詩歌の代表であった玉磵と為相の作を雲母引きの奉書にたっぷりした和様であしらう。題簽存。

俳度曲　半紙本　二巻二冊

俳諧撰集。原題簽なし。取り合せ本。上巻のみ改装裏打本で落丁多し。豊嶋治左衛門（識月）編。沾洲跋。「享保七壬寅年林鐘吉日」自奥。「江戸日本橋南一町目／萬屋清兵衛板」。観世流の謡曲名（上下巻各百十番）を題とする絵と発句を一組にして、それを半丁ごとに配した絵俳書。

誹諧小式　横本一冊

俳諧作法書。山岡元隣著、寛文二年自跋。同年の求心子序あり。題簽剝落。序題「誹諧小式序」。本文は三十一条と追加一条にわたり貞門俳諧の作法を具体的に説く。

絵女じんぎ物語　大本二冊

仮名草子。女訓もの。雷文繋ぎ唐草空押模様黒色表紙。原題簽。絵入、14行。無刊記。

〔子供の絵本10種〕

絵本花甲、化粧なぞ雪の水、祝言狐のむこ入、七福鼡長者絵尽、絵本武勇海、絵本唐勇伝、絵本豆腐記、順風湊入船、源家四つ車、絵本福寿笑顔湊、以上10種。紺表紙に紅色題簽、行成表紙、その他の表紙を持つ半紙本七、八丁ほどの絵本類。およそ享保から寛政ごろの上方版。うち、菱屋治兵衛版1点、天満屋安兵衛版2点。

彙報

委員会日誌

平成元年
10月20日　国文学文献資料調査員会議（中部地区）
10月27日　国文学文献資料調査員会議（北海道・東北地区）
11月10日　国際日本文学研究集会委員会（第三回）
12月13日　共同研究委員会（第二回）
平成2年
2月1日　国文学文献資料収集計画委員会（第二回）
2月9日　共同研究委員会（第三回）
2月9日　大学院教育協力委員会（第一回）
3月7日　情報処理システム運用委員会（第二回）
3月13日　古典籍総合目録委員会（第一回）

評議員会の開催について

本年度第二回評議員会が、平成二年三月七日（水）に開催され、議事は、管理運営の概況並びに平成二年度予算内示及び科学研究費補助金並びに平成二年度事業計画について評議が行われた。

運営協議員会の開催について

平成元年六月二十八日付けで国立学校設置法等の一部改正が行われ、従来の運営協議員で構成する会議が運営協議員会という合議体となり、第一回（本年度通算第二回）運営協議員会が、平成元年十一月二十日（月）に開催され、会長に長谷川強運営協議員が、副会長に佐竹昭廣運営協議員がそれぞれ就任した。議事は、教官人事について協議が行われた。

第二回（本年度通算第三回）運営協議員会が、平成二年二月二十一日（水）に開催され、議事は、教官人事並びに管理運営の概況並びに平成二年度予算内示及び科学研究費補助金並びに平成二年度事業計画について協議が行われた。

外国出張

安永　尚志
渡航先　連合王国・スペイン
目　的　古典本文テキストデータベースの調査研究、国際学術VANによるサービス方式ミーティング及び人文系国際共同研究推進問題調査研究
期　間　平成2年3月17日～平成2年3月28日

人事異動（平成元年9月1日～平成2年2月）

（併任）平成元年9月1日～平成2年3月31日
文部教官（文献資料部助教授）
長島弘明（名古屋大学助教授）
（転出）平成元年10月1日付
文部事務官（会計課長）
牧口　勉（奈良女子大学へ）
（転入）平成元年10月1日付
文部事務官（会計課長）
小林芳夫（弘前大学から）

国際日本文学研究集会会議録（第13回）

あいさつ　小山　弘志
研究発表
江戸初期諧文献による男色史　ポール・シャロウ
杜甫の「春望」と芭蕉　曹　元春
江戸時代の漢詩とリアリズム　マルグリット・大矢
『春雨物語』「目ひとつの神」の世界　金　玉姫
江戸文壇における『水滸伝』受容の形跡　胡　凱
『里見八犬伝』の龍女たち小谷野　敦
夏目漱石の漢詩と小説とのかかわり　曽　秋桂
――「三四郎」における「雲」――
日本近代文学における西洋演劇受容　金子　幸代
――森　鷗外を中心に――
公開講演
戯作の作者・作者の戯作　スミエ・ジョーンズ
春琴と佐助　秦　恒平
――「読む」という事――
記　録
日程および研究集会の経過
参加者名簿
国際日本文学研究集会委員会名簿

利用者へのお知らせ

◆『古典籍総合目録』の刊行について

このたび、当館編集による『古典籍総合目録』全三巻が、岩波書店から刊行の運びとなりました。

古典籍総合目録作成事業は、当館の事業として昭和五十五年度から開始され、データの蓄積を行ってきたものです。

この目録には、『国書総目録』刊行後に作成された図書館・文庫等八三箇所の所蔵目録の写本・版本のデータが収録されています。収録書目数は、約四三、〇〇〇点、そのうち『国書総目録』に未収録のものは約一〇、〇〇〇点です。

◆文献複写料金の一部改定について

昨年四月、消費税導入に伴い、当館の文献複写料金が改定になりましたが、このたび四月から、一部改定（値下げ）となります。新料金は次のとおりです。

○リーダープリンター及び電子複写方式（一枚）　三五円

なお、マイクロフィルム方式の料金はいままでどおりです。

◆マイクロ資料目録書名索引の刊行について

このたび『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録書名索引一九六七年―一九八八年』が刊行されました。

この索引は、『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九七六年』（第1冊）から『同一九八八年』（第12冊）まで計十二冊分の累積書名索引です。

この索引によって、十二冊分約十万点のマイクロ資料が書名によって検索できるようになりました。

◆所蔵目録刊行のご案内

このたび『マイクロ資料目録』『逐次刊行物目録』の最新版が刊行されましたのでご案内します。

(1)『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八九年』（第13冊）

この目録には、二九所蔵者（文庫）分、八、三七四点が収録されています。そのうち七所蔵者（文庫）が、今回新たに収録されるものです。

収録所蔵者（文庫）は、次のとおりです（＊印は新規収録分）。

文庫No	所蔵者
25	東京都立中央図書館
30	刈谷市立刈谷図書館（村上文庫）
33	東洋文庫
34	神宮文庫
55	陽明文庫
73	今治市河野美術館
78	舞鶴市立西図書館
88	東京芸術大学附属図書館
92	上田市立図書館（花月文庫）
99	高知県立図書館（山内文庫）
216	学習院大学国語国文学研究室
219	麗沢大学図書館（田中文庫）
224	熊本大学附属図書館（北岡文庫）
238	法政大学能楽研究所（鴻山文庫）
242	京都女子大学図書館（吉沢文庫）
243	彦根市立図書館（琴堂文庫）
252	秋田県立秋田図書館（時雨庵文庫）
255	新城市教育委員会（牧野文庫）
258	臼杵市立臼杵図書館
271	多和文庫
272	＊弘前市立弘前図書館
274	＊金沢市立図書館（稼堂文庫）
275	＊金城学院大学図書館
276	加賀市立図書館（聖藩文庫）
277	＊園部町教育委員会（小出文庫）
278	＊大須文庫
280	＊大阪大学附属図書館（赤木文庫）
296	＊尊経閣文庫
オ7	大方保

(2)『国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録一九九〇年』

収録誌数は、前年分より五七誌増え、三、三九三タイトルで、昨年十一月末までの受入れ分が収録されています。

◆マイクロ資料目録の市販について

『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八八年（縮刷版）』（第12冊）が笠間書院より刊行され市販されています（定価六、一八〇円）。既刊十一冊とあわせて御利用ください。

平成二年度春季学会開催一覧

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定なしか、または大会期日未定。

解釈学会　①〒一〇一千代田区神田神保町二―四六第２十勝ビル教育出版センター新社内

近代語学会　①〒一六九新宿区北新宿三―一〇―五〇七

国語学会　①〒一〇一千代田区神田錦町三―一一武蔵野書院気付②五月二六～二七日③明海大学

古事記学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部日本文学第二研究室②六月一六～一七日③学習院女子短期大学

古代文学会　①〒九五〇―〇三埼玉県鳩山町鳩が丘三―一八―一六居駒永幸方

上代文学会　①〒一五四世田谷区駒沢一―二三―一駒沢大学文学部国文学研究室②五月一二～一四日③福岡大学

説話文学会　①〒一五四世田谷区太子堂一―七昭和女子大学文学部日本文学科松田研究室内②六月二三～二四日③親和女子大学

全国大学国語国文学会　①〒一〇一千代田区猿楽町一―三―一桜楓社気付②六月九～一〇日③大正大学

中古文学会　①〒一六九新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学教育学部中野研究室内②五月二六～二七日③武蔵野女子大学

中世文学会　①〒一一三文京区本郷七―三―一東京大学文学部国文学科内②六月一日～三日③一日銭仙会能舞台・観世能楽堂、二日東京大学

日本演劇学会　①〒一六九新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学演劇博物館内

日本歌謡学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部日本文学第七研究室内②五月一二～一三日③白百合女子大学

日本近世文学会　①〒一〇二千代田区三番町六　二松学舎大学近世文学研究室内②六月一六～一七日③学習院大学

日本近代文学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部内②五月二六～二七日③国学院大学

日本口承文芸学会　①〒一一四北区西ケ原四―五一―二一東京外国語大学ＡＡ研川田研究室内②六月二～三日③愛媛大学

日本文学協会　①〒一七〇豊島区南大塚二―一七―一〇

日本文学風土学会　①〒二一四川崎市多摩区東三田二―一―一専修大学文学部国文学研究室内②六月一六～一七日③専修大学神田校舎

日本文芸研究会　①〒九八〇仙台市青葉区川内東北大学文学部内②六月九～一〇日③東北大学文学部

俳文学会　①〒六五一―一一神戸市北区鈴蘭台北町七―一三―一親和女子大学国文学研究室内

表現学会　①〒七三〇広島市中区東千田町一―一―八九広島大学総合科学部永尾研究室内②六月九～十日③広島大学総合科学部

仏教文学会　①〒六〇四京都市中京区西ノ京壺ノ内町八―一花園大学国文学研究室内②六月九～十日③花園大学

万葉学会　①〒五六五吹田市千里山東三関西大学国文学研究室内

美夫君志会　①〒四六六名古屋市昭和区八事本町一〇一中京大学文学部国文学研究室内

和歌文学会　①〒一〇二千代田区三番町六　二松学舎大学国文学研究室内

国文学研究資料館報　第三十四号
平成二年三月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一-一六-一〇
郵便番号一四二
電話(七八五)七一三一（代）
印刷所　株式会社　三興